

平成22年度 学校自己評価システムシート (県立 和光 高等学校)

目指す学校像	進取の気風に富み、社会人としての基礎的な素養を身につけた生徒を育成する。
--------	--------------------------------------

重点目標	<ol style="list-style-type: none"> 1 基本的生活習慣の確立とともに、規範意識や社会性を身につけさせる。 2 授業改善を進め、生徒の学習習慣と基礎学力の定着を図る。 3 体験活動や進路行事をとおして、進路意識を高め、進路希望の実現を図る。 4 部活動や学校行事を充実し、ボランティア活動を推奨し、活力ある開かれた学校をつくる。
------	--

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	7名
	生徒	3名
	事務局(教職員)	12名

※重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学校自己評価							学校関係者評価	
年度目標				年度評価(1月17日現在)			実施日	平成23年 2月 3日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等
1	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な生活習慣の確立が不十分で、遅刻や学力不振を経て、生徒指導対象の問題行動や中途退学につながり、生徒が多く見られる。 年間の中途退学者数は減少したが、年度末の転学者が大幅に増加した。 昨年度から遅刻カードを導入したが、遅刻する生徒数の改善には至らず、昨年度よりも増加した。 昨年度、生徒指導件数が増加し、問題行動をおこす生徒の割合が高い。 自己理解、他者理解の力やコミュニケーション能力が育っていない生徒が多く、人間関係のささいなトラブルをきっかけに、不登校や退学にいたる生徒がいる。 スクールカウンセラーとの教育相談会を定期的に関き、心の問題を抱えている生徒の指導は効果を上げている。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の生活習慣を確立させ、中途退学者数を減少させる。 生徒の規律ある態度を育成し、遅刻数、生徒指導件数を減少させる。 不登校になる生徒を防止する。 	<ul style="list-style-type: none"> 朝の立哨指導や学年集会等を通じて生徒の規範意識啓蒙や社会性の涵養に取組む。また、全教員が共通理解をもって生徒指導にあたる。 社会体験活動や進路行事、部活動等を通じて生徒の学校生活への目的意識を育む。 遅刻カードや学年毎の遅刻指導を徹底強化することにより生徒の遅刻に対する意識変革を促す。 校内巡回、校外指導を徹底するとともに担任と家庭との連携体制を強化し問題行動の未然防止に取り組む。 学年担任と養護教諭や教育相談委員会等が連携を密にして個々の生徒の実態を把握して不登校の防止に努める。 「あり方生き方教育」を活用し、生徒の道徳心の啓蒙を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 中途退学者の減少(前年比20%減) 高校生にふさわしい身だしなみや言葉遣い 遅刻欠席数の削減(前年比10%減) 生徒指導件数の削減(前年比10%減) 	<ul style="list-style-type: none"> 少人数学級編成、社会体験活動、スクールカウンセラーの活用、個人面談の充実等の工夫の結果、中途退学者は減少傾向にある。最終的には前年度比10%減程度の見込みである。 頭髪服装指導対象者の割合は減少しており、挨拶をする生徒は増えてきている。 遅刻者数は12月末現在で前年度比24%減である。 12月末現在で生徒指導件数は前年度比55%増である。 長欠となっている生徒は依然として多い。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 中途退学者は年々減少しているが、依然として多い。次年度より、基礎学力の向上を目指し、「ベーシック」を導入するなど、学力不振者による中途退学防止への対応を実施する。 身だしなみや挨拶の指導は一定の成果がみられるが、さらに教員間の共通理解を図り、足並みをそろえて指導する体制を確立する。 遅刻者数は減少したが、さらなる改善が必要である。新たな遅刻防止のための指導を考える。 問題行動は1年生の2学期に集中した。早期の生活習慣の確立と規範意識の醸成が課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> 遅刻の問題や身だしなみの指導等は学校だけでは解決できない部分もある。学校の方策を各家庭に周知し、協力体制を構築する必要がある。 遅刻指導の効果は認められるが、その絶対数は依然として多い。家庭との協力とともに取組の強化を期待する。 地域から見て生徒の状況は年々良くなっている。しかしスカート丈が短い生徒が多く、身だしなみについては一層努力してもらいたい。
2	<ul style="list-style-type: none"> 毎年、授業を受ける習慣が定着していない生徒、極端に基礎学力の不足している生徒が入学する。積極的な学習姿勢に欠ける生徒が多い。 1年次の25人の少人数学級編成、2年次の数学・英語の習熟度別少人数授業により個に応じた丁寧な指導を実施してその効果は現れている。しかし、成績不振者数は多く、生徒の基礎学力向上に向けた一層の取組が必要である。 公開授業、授業研究等教員間での授業改善を推し進めている。しかし、校内授業研究週間での授業参観票の利用は不十分であり、また、学力差のある生徒に対し一層、生徒の実態及び個に応じた授業を実践する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業規律を確立し高校生としての基礎学力を定着させる。 教員の授業研究を推進し、授業の質の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 全職員の共通理解のもと、チャイム着席、授業環境の整備を一層徹底し生徒の授業に対する意識の向上を図る。 校内授業研究週間の実施及び、初任者研修、年次研修の研究授業を活用し、教員相互による授業研究を一層推進し生徒の実態に応じた授業の実施に努める。 生徒の授業評価アンケートの結果を教科内研修に活用し、その総括を教育活動にフィードバックする。 次年度の学校設定科目開設に向けて、綿密な準備を進め、その研究を通じて本年度の生徒基礎学力の定着に反映させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業評価アンケート結果での生徒の授業に対する理解度、満足度の向上 成績不良者の減少(前年比10%減) 成績優良者の増加(前年比10%増) 成績不振による転退学者の減少 	<ul style="list-style-type: none"> H21年度は理解度について69%、満足度について69%が肯定的な回答をしていたが、H22年度はそれぞれ75%、77%と向上した。 成績不良者は前年度比11.5%減少した。 成績優良者は1学期は1.9%減少したが、2学期は5.2%と増加した。 12月末現在の一家転住以外の転退学者数は前年度比7名減である。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 授業評価アンケートに対する生徒の理解度・満足度の回答は向上しているが、実際の生徒の学力向上が伴っていないところがある。今後も理解度・満足度を高める工夫をするとともに、基礎学力の向上を図る。 さらに成績不良者の減少、成績優良者の増加を目指し、授業改善を図る取り組みを進める。 成績不振者に対する学力向上のための取組を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> 来年度設置される学校設置科目「ベーシック」の活用により、学力向上に向けて一層努力をしてもらいたい。 学習指導については、少人数学級編成や習熟度授業など一定の成果が見られる。成績不振者に対する指導に一層取り組んでももらいたい。
3	<ul style="list-style-type: none"> 一部の生徒は進路意識が低く、目的意識の啓蒙が課題である。 社会情勢の影響を受け、進路未決定のまま卒業した生徒が前年度を上回った。 1学年全員に5日間の社会体験活動を実施し、社会性の醸成や規範意識の向上で効果をあげているが、全日程の参加数の向上が課題もある。 	<ul style="list-style-type: none"> 多様な進路希望に対し進路決定率を高める。 進路行事を通じて生徒の進路意識を向上させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 就職支援アドバイザーの活用とともに学年・担任、進路部とが連携し進路計画を実施する。 新たな就職企業の開拓を進め、就職相談会等の活用することにより進路決定率を上げる。 進路行事やLHRを通じて進路ガイダンスを実施し、生徒の進路意識の啓蒙を図る 就労体験事業を通じて人格形成と進路意識の向上を図るとともに学校生活の目的意識を啓蒙する。 	<ul style="list-style-type: none"> 進路決定率の増加(前年比10%増) 進路希望調査での「未定」の割合の変化 社会体験活動の全日程参加率の向上 	<ul style="list-style-type: none"> 進路決定率はH21年度12月末で60%であったが、H22年度は74%と14%増加することができた。 社会体験活動の全日程参加率はH21年度55.8%であったのに対し、H22年度75.8%と20%向上した。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 社会情勢の影響を受け、就職においては非常に厳しい状況が続いているので、従来よりも計画的な早期からの指導が求められる。 全日程参加率は昨年度に比べれば大幅に向上した。進路意識の啓蒙を促進するよう社会体験活動の活用を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> このような社会情勢の中で進路指導の取組については評価でき、学校の努力に感謝する。
4	<ul style="list-style-type: none"> 部活動への加入率は低いが、積極的に活動している生徒は学校行事等で中心となって活躍している。 文化祭、体育祭等の学校行事や交流会、ボランティアなど生徒会の活動は学校の活性化に貢献している。活動を一般生徒へ裾野を広げることが課題である。 学校行事等に対する保護者の積極的な参加、協力があり、PTA活動への参加意識は高まりつつある。しかしまだその範囲は限られていて、一部の方の負担が増大している一面もある。 	<ul style="list-style-type: none"> 部活動、学校行事、校外活動に積極的に参加する生徒を育成する。 保護者全体の協力体制を強化し、PTA・後援会活動の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 学年・担任と顧問の連絡体制を整備し生徒に部活動加入を促進する。また、生徒募集においても部活動や課外活動で活躍する生徒の募集に努めることにより学校全体として部活動を奨励する気運を高める。 SPPの活動、ボランティア活動等の校外活動を生徒会や部活動を核にして、多くの生徒教員の参加を促し、学校全体として地域の活動に参画する。 HPやメール、学校からの通信等を通じPTA行事について早めの周知に努め、保護者の参加増加を図るとともに職員の協力体制を強化する。 保護者アンケートの回収率を上げ、保護者の意見を学校運営に反映させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 部活動加入率の増加(前年比10%増) ボランティア活動等の校外行事への参加者の増加(前年比10%増) PTA活動の保護者参加率の向上 	<ul style="list-style-type: none"> 年度当初の部活動加入率は、減少している。生徒に部活動への参加を呼びかけているが実質活動率は低い。しかし部活動単位での行事や地域との共同活動を積極的に実施した。 学校行事への生徒の参加状況には積極性がみられるようになった。 昨年とほぼ同数のボランティア行事に参加して地域貢献をした。 体育祭や文化祭の保護者の参観数は大幅に増加した。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 殆どの生徒が学校行事に真摯に取り組む姿勢がある。部活動加入状況調査を学期ごとに実施するなど、長期的に部活動等の課外活動の参加を促進することが課題である。 PTA活動は一部の保護者に頼っている現状がある。広報活動を充実し保護者の協力体制を強化する。 	<ul style="list-style-type: none"> 市や地域の行事に多数参加し、ボランティア活動にも積極的に取り組んでいる。高校生を市や地域が受け入れる体制が弱い部分もあるので、更に協力体制を構築し地域に根ざした学校を目指していただきたい。 情報交換や交流等、中学校との連携を一層強化し、学校の活性化に取り組んでももらいたい。